

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 10 日現在

機関番号：36301

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2009～2011

課題番号：21652021

研究課題名（和文） アメリカ移民後の東欧系ユダヤ人の音楽（クレズマー）に関する文化史的研究

研究課題名（英文） Cultural-historical Study on the Music of Jewish Immigrants from Eastern Europe

研究代表者

黒田 晴之（KURODA HARUYUKI）

松山大学・経済学部・教授

研究者番号：80320109

研究成果の概要（和文）：「クレズマー」は東欧ユダヤ人ゆかりの音楽で、ユダヤ人社会内部では聖と俗とを、この社会の境界線上ではユダヤと非ユダヤを媒介した。こうしたメッセンジャーの役割をミッキー・カツは、1950年代のアメリカでも果たせることを実演してみせたが、これは同化に励む同胞からは疎まれる面もあった。かような愛憎相半ばするカツ受容をユダヤ系アメリカ人の同化の分水嶺として位置付けることができた。

研究成果の概要（英文）："Klezmer" is a music of the Jews of Eastern Europe that mediated between Holy and Secular in Jewish communities, and between the Ashkenazic Jews and their neighbors on the borders. Mickey Katz demonstrated that one could perform the same messenger-role in the 1950s in America. His music was loved by the Jewish audience, but it disturbed them as well. The conclusion is that this ambivalence toward the music of Mickey Katz indicated the turning point of the assimilation of the Jews in America.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,500,000	0	1,500,000
2010年度	500,000	0	500,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
総計	2,800,000	240,000	3,040,000

研究分野：ドイツ文学、ユダヤ文化

科研費の分科・細目：芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：クレズマー、東欧、ユダヤ人、移民、同化、ミッキー・カツ

## 1. 研究開始当初の背景

クレズマーは以下のように大別される。

- (1) ユダヤ人の放浪楽士「クレズマー」(Klezmer)が中世以来、周囲の異民族と接触しながら創造した、主として器楽による音楽(ドイツの放浪楽士「シュピールマン」(Spielmann)やロマの楽士とも重なる)
  - (2) アメリカに移民したクレズマーが現地で展開した音楽(ジャズと一部重なる)
- これらのうち(1)については、Walter Salmen の『中世のシュピールマン』(*Spielmann im Mittelalter*. 1983)以来、中世クレ

ズマーの研究が徐々に始まってきた。上記 2 は以下のように細分化できる。

- (2-1) もともと東欧でクレズマーになる教育を受け、移民後もアメリカのユダヤ人コミュニティを中心に、クレズマーの保存と発展に携わった第 1 世の音楽
- (2-2) クレズマーの出自でありながら、ヨーロッパないしアメリカで、クラシックやポピュラーに転向した音楽家の音楽
- (2-3) 第 1 世の音楽を引き継ぎながらアメリカ音楽を吸収し、第 2 次世界大戦前後までクレズマーに従事した第 2 世以降の音楽、あるいは 1980 年代のリヴァイヴァル

以降のそれ  
 本研究代表者は上記の(1)と(2-2)について、「あるピアニストの名前への覚え書き」(松山大学『言語文化研究』2004年)で、映画『戦場のピアニスト』の主人公 Wladyslaw Szpilman を例に、シュビールマンとクレズマーとの関係を、「なにがガトリフの『僕のスウィング』に描かれたか」(『松山大学論集』2005年)では、クレズマーとロマの楽士との関係を明らかにした。(2-2)については、『『子牛』のまわりにはいた人たち』(日本・ユダヤ文化研究会『ナマール(港)』2003年)で、「素敵あなた」(Bei mir bist du schön)や「ドナ・ドナ」で知られる Sholom Secunda が、アメリカのイディッシュ劇場の作曲家になった経緯を、「シャガールの描いた楽士はどんな音楽を演奏したか」(松山大学『言語文化研究』2008年)では、ロシア革命前後のユダヤ系音楽家(クラシックを含む)が民族意識の高まりとともに、フィールドワークに基づいて音楽を模索した過程を明らかにした。同様のテーマを扱ったものには、アメリカの Yale Strom や Henry Sapoznik, ドイツの Joel Rubin や Jascha Nemtsov の先駆的研究があるが、国内では伊東信宏氏(大阪大学)と本申請者のものを除きほぼ皆無である。

これらの研究成果を発展させて本研究では(2-3)の音楽を集中的に考察する。

## 2. 研究の目的

移民第2世でクレズマーとノヴェルティエ音楽を融合させたミッキー・カツツ(Mickey Katz, 1909-1985)を例に、本研究は相互に関連する以下の3つの文化史的な論点を解明する。

- (1) アメリカのユダヤ移民社会で伝統的・民族的な音楽クレズマーがどのように受容されたか。
- (2) カツツが自他の文化をパロディー化して引き起こす「笑い」が、移民先の社会(非ユダヤ人のリスナーを含む)のなかでどのように機能したか、クレズマーというローカルな性格の強かった音楽が、なぜアメリカで半世紀近くも大衆音楽として存続できたのか。

- (3) 前項「1. 研究開始当初の背景」の(2-1), (2-2), (2-3)の連続性および断絶はどのように分節化できるか。

わが国のユダヤ研究は宗教・歴史・上位文化(ハイ・カルチャー)に偏り、ユダヤ人の日常生活で培われた文化を扱ったものは意外に少ない。さらにクレズマーと呼ばれた楽士はそもそも、帝政ロシアのユダヤ人居住区・中欧(おもにドイツ)・アメリカと複数の地域で活動し、使用言語が居住先の言語・イディッシュ等にまたがり、音楽的にも民族音楽・クラシック・ポピュラーを横断しているため、

従来の各国史別・ジャンル別の研究区分には収まりにくい。かくて本研究はクレズマーを対象化するためのアイディアとして、第2次世界大戦前後に活動したミッキー・カツツのケース・スタディーにする。

カツツはノヴェルティエ音楽の Spike Jones のバンドに属していたが(これを戦後日本で発展させたのがフランキー堺である)、バンド脱退後はクレズマーとアメリカのポピュラー音楽を混合し、かつイディッシュ・英語・Yinglish (前2者からの新語)を歌詞に取り入れたパロディー音楽を、一貫して演奏してきたアメリカのクレズマーである。かれを研究対象の中心にすることによって得られるチャレンジ性としては、したがって

- (1) かれは幼少期にクラシックの教育も受けていたので、上位文化から大衆文化までもカヴァーし(カツツ自身のバンドは Swing Jazz の音楽家を擁していた)、ジャンル別になされてきた従来の音楽研究とは別の視座が得られる。
  - (2) かれ自身が民族・世代・言語・ジャンル横断的な音楽家だったため、ユダヤ固有の文化と他の文化との相互的な接触・干渉・影響関係を跡づけることができる。
  - (3) カツツは ① 英語・イディッシュ語というバイリンガルな環境で、② 2言語それぞれの話者あるいは2言語使用の話者、さらには ③ ユダヤ人と非ユダヤ人という異なるリスナーに、④ ラジオやレコードなども使ってクレズマーを届けたため、メディアが大衆文化のなかで果たす超領域的な役割を探ることができる
  - (4) さらに従来の各国史・ジャンル別の音楽研究への問題提起、(ユダヤ系が多く活動した)クラシックやジャズを大衆文化の点から評価し直す視点、戦後の日本にアメリカ音楽が輸入された過程との比較研究も、本研究の周辺的ではあるが重要な副産物として期待できる
- ことが挙げられる。

## 3. 研究の方法

クレズマーという対象は以下のように、従来とは異なる研究を要請する。

	従来型の音楽研究	クレズマー研究
対象となる音楽家・聴衆	歴史的に見て比較的明確な民族意識をもった定住民(を想定している)	おもに東欧の複数の地域に散在したユダヤ人(クレズマーは周辺民族のあいだも移動した)、アメリカに移民した2世以降を含むユダヤ人とその周辺

研究が成立した背景	民族ないしは国民国家(の大きな意味での文化政策)	1968年の5月革命や公民権運動の影響のもと、(自他を問わず)高まったマイノリティーへの関心、1980年代のクレズマー・リヴァイヴァル
対象の価値付け	(下位(サブ)文化や大衆文化の価値区分を決定し、なおかつそれを包摂する主体としての)主流文化	主流文化によって下位に固定されてきた文化、あるいはそうした価値観のなかで不可視化されてきた文化

たんにクレズマーを対抗文化として見る・提示するのは生産的でなく、主流・対抗・下位・大衆といった文化の序列を超えて、ユダヤ人と非ユダヤ人とを問わずアメリカのリスナーのあいだで、20世紀を通じて聴かれてきたという現象そのもの、さらにはそうした対象を重視する研究が生まれた経緯に注目したい。かくて本研究の提案する着想と方法論とは(たとえ迂遠であろうと)まずもって、クレズマーの実態を可能なかぎり正確・客観的に記述することにある。

こうした研究上の特殊性があるため、次の3点を本研究の主な方法とする。

(1) 基礎的な資料の収集とその分析

- ① 音楽録音等の資料を収集する。ミッキー・カツ、20世紀前半の欧米のクレズマー、20世紀前半のアメリカのポピュラー音楽、カツのバンドに加わったスウィング・ジャズの演奏家のものを、SP・LP・CDで収集する。さらにカツのイディッシュ・英語・Yinglishによる歌詞をテキストに起こすため、国内外の研究者に協力を仰ぐ。
- ② 20世紀前半に欧米で制作された(主にイディッシュ語による)映画のソフト。
- ③ クレズマー・リヴァイヴァル以前に公刊されたユダヤ音楽の研究書(Irene Heskes: *The Resource Book of Jewish Music*. 1985に挙げられているものから精査する)。
- ④ 20世紀前半のアメリカにおけるイディッシュ劇の研究書。
- ⑤ アメリカのユダヤ移民とその同化に関する研究書

これらをまずインターネットなどを通じて調査し、収集対象の再検討・精緻化をはかったうえで、ニューヨークのユダヤ研究所YIVO・ニューヨーク大学など、アメリカ現地での資料収集、ないしはベルリンの国立図書館での資料収集を実施する。

(2) ヒアリングの準備と実施

クレズマー研究者のYale Strom氏(サン・ディエゴ大学教授)へのヒアリングを実施する。Strom氏は"*The Book of Klezmer*"の著者で、クレズマー・リヴァイヴァルが本格化する以前から、欧米各地でフィールドワークを行なっており、その成果を数々の著作と映画で発表している第一人者である。

(3) 国内での意見交換

国内のイディッシュ文化、ユダヤ学、音楽学の研究者と、随時意見交換を行なう。以上の作業を通じてミッキー・カツの音楽を分析し、欧米に跨るユダヤ文化のなかに位置付ける。

4. 研究成果

クレズマーというジャンルを概観するのに必要な資料(各種メディアによる録音資料、各国語による関係文献)は最低限収集できた。なおその録音資料の一部を元にして著書『クレズマーの文化史 東欧からアメリカに渡ったユダヤの音楽』所収の「ディスコグラフィ」を作成した。さらにミッキー・カツの"Yinglish"による歌詞も、Yale Strom氏とElizabeth Schwartz氏の協力のおかげで、主要なものを入手して拙著『クレズマーの文化史』に盛り込んだ。こうした準備作業を経たのちに、本研究はその最も中心的な成果として、ミッキー・カツ等に関する論考を、以下のように展開することができた。

- (1) ミッキー・カツを考察するにあたりまず、クレズマーという音楽ジャンルについて、想定されるその起源から現代にいたる歴史を記述した。中世から現代にいたるクレズマーの特徴を、差別ゆえに可能となったユダヤ人/非ユダヤ人のあいだの越境性、支配文化とのせめぎ合いの結果としての雑食性として捉え、東欧および移民後のアメリカでの活動を追った。この過程のなかで楽譜・レコード・ラジオ等のメディアが果たした役割にも触れた。これは拙著『クレズマーの文化史』第2章「『縫い目』と『孢子』で迎えるクレズマー小史」にまとめた。
- (2) カツの先駆者としてAbe Schwartz(1881-1963)を取り上げ、生活の苦しさを吐露するものが多かった移民第1世代の音楽のなかにあつて、Schwartzらには笑いによって苦しさを紛らわせる傾向もあったこと、ユダヤの風俗や出身国の政治情勢を茶化す歌すら生産されたことを指摘した。
- (3) カツらは同化が進行しつつあった第2世代であり、この世代は公私それぞれの生活空間で、英語とイディッシュを併用していた。英語とイディッシュのちゃんぽんYinglishを盛り込み、かつ当時の流

行歌をクレズマーに翻案するカツ音楽の「笑い」は、言語的にも音楽的にも分断されつつあった3世代(親/子/孫)に、共通のプラットフォームを提供する働きをしたことを、カツ自身による歌詞および曲目解説の分析によって跡付けた。

- (4) ただしカツの音楽は同化に励む第3世代以降にとっては、ユダヤ人は周囲とは違うという他者性を誇張するものであり、かえって感情を逆撫するような性格を帯びていた。かような愛憎相半ばするカツ受容をユダヤ系アメリカ人の同化の分水嶺として位置付けた。2~4については拙著『クレズマーの文化史』第7章「ユダヤ人の笑いをクレズマーのなかに探る」にまとめた。
- (5) 以上の(1)~(4)での議論を踏まえてクレズマーを、聖/俗、ユダヤ/非ユダヤ、欧/米、親/子/孫、過去/現在を媒介するメッセンジャーとして捉える視座、トニー谷のような戦後直後の日本の音楽家には、支配的なアメリカ文化への矛盾する態度があるが、これをミッキー・カツ世代の同化ユダヤ人との平行関係で見る視座を、拙著『クレズマーの文化史』最終章で示唆した。

これら以外に本研究の特筆すべき副産物としては、第2次大戦期に東欧から上海に逃れたユダヤ人について、かれらと日本人とのあいだで音楽的な交流があったか、今後の研究に繋がるような指摘もすることができた。拙著第5章「第二次世界大戦中の上海で流れたクレズマー」がその成果の一部である。

さらに本研究に連なる現在進行中の研究としては、パウル・ツェランの「死のフーガ」に描かれた音楽を、実証的に検討する作業に入っていることを付記しておく。

こうした多岐にわたる成果を出すにあたっては、Yale Strom氏とElizabeth Schwartz氏を招聘し、文献からだけでは窺い知れない情報・助言が得られたことが大きい。さらに両氏を講師としたワークショップとシンポジウムを、大阪大学グローバルCOE「コンフリクトの人文国際研究教育拠点」研究プロジェクト「ヴィジュアル・アートにおけるグローバル・コンフリクトの研究」「音楽の生産・消費・流通におけるコンフリクト」「美的近代におけるローカリズムと反ローカリズム」「シオニズムの考古学」、神戸・ユダヤ文化研究会、科研基盤B「ユーラシア・ユダヤ現代史の構築」(研究代表者:立教大学教授・高尾千津子氏)とのコンソーシアムとして、一般市民に向けて開催することができた。

上記以外の成果を参考までに付け加えておけば、2011年11月27日のシンポジウム「民魂の音を聴く 東欧ユダヤ民族音楽〈クレズマー〉と現代世界」(大阪大学グローバル

COEプログラムその他による共催)では、音楽評論家の平井玄氏、チンドンからクレズマーまでを弾きこなすクラリネット奏者の大熊ワタル氏、『中東欧音楽の回路』の伊東信宏氏(大阪大学)とともに、一般市民向けにクレズマーの魅力を語ることができた。2011年12月12日の「東欧ユダヤの音楽クレズマー 異種との接触の合間で」(北海道大学グローバルCOEプログラム)では、クレズマーの全般的な概説を行なうとともに、スラブ研究センター研究員の左近幸村氏とクロストークを行なった。

拙著『クレズマーの文化史』は「ラティナー」「ミュージックマガジン」「ジャズ批評」「みりとす」等で書評に取り上げられ、「東京新聞」「ふえみん」「週刊読書人(年末回顧総特集号)」でも紹介され、NHK-FM「ワールドミュージックタイム」(2011年9月19日)でも番組内で触れられた。以上をもって本研究には一定程度の意義と重要性があったと判断する。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ①黒田晴之、シャガールの描いた楽士はどんな音楽奏したか(3)あるいはロシア革命前後のユダヤ人が展開した音楽について、松山大学『言語文化研究』、査読無、29巻1号、2009年、1-42ページ
- ②黒田晴之、(書評)アモス・オズ著、村田靖子訳『わたしたちが正しい場所に花は咲かない』、神戸・ユダヤ文化研究会『ナマール(港)』、査読無、15巻、2010年、79-81ページ
- ③黒田晴之、(書評)赤尾光春、他、編著『シオニズムの解剖学』、神戸・ユダヤ文化研究会『ナマール(港)』、査読無、16巻、2011年、81-85ページ

[学会発表] (計7件)

- ①黒田晴之、文学にとって1944年とは? ツェランとツァイトリンを例に、神戸・ユダヤ文化研究会、2009年7月25日、松山大学西宮温山記念会館
- ②黒田晴之、こんな旅をクレズマーはしてきた 東欧ユダヤ人の音楽のフットワーク、神戸・ユダヤ文化研究会、2010年5月16日、こうべまちづくり会館
- ③黒田晴之、ミッキー・カツ(Mickey Katz, 1903-1985)の歌に辿る1950年代のユダヤ系アメリカ人の笑い、日本ユダヤ学会、2010年10月30日、早稲田大学
- ④黒田晴之、(招待講演)ユダヤ人の音楽が果たした社会的役割 かれらのフットワーク

とネットワークを中心に、広島大学マネジメント学会第34回研究会、2010年12月18日、広島大学

- ⑤黒田晴之、パウル・ツェラン「死のフーガ」再読 あらたな読みを模索するための予備作業、日本独文学会、2011年10月15日、金沢大学
- ⑥黒田晴之、民魂の音を聴く 東欧ユダヤ民族音楽〈クレズマー〉と現代世界、大阪大学グローバルCOEプログラムその他による共催、2011年11月27日、大阪大学
- ⑦黒田晴之、(招待講演)東欧ユダヤの音楽クレズマー 異種との接触の合間で、北海道大学グローバルCOEプログラム、2011年10月15日、北海道大学スラブ研究センター

[図書] (計2件)

- ①黒田晴之、日本独文学会、「わたしたちの最も近い似姿はポーリングのピンである」カネッティ没後14年に『群衆と権力』を読む意味について、(宍戸節太郎編)『『群衆と権力』の射程 エリアス・カネッティ再読』所収、2009年、計92ページのうち34-48ページ担当
- ②黒田晴之、人文書院、クレズマーの文化史 東欧からアメリカに渡ったユダヤの音楽、2010年、計284ページ

[その他]

ホームページ等

[http://www.cc.matsuyama-u.ac.jp/~kuroda/Klezmer\\_Elizabeth\\_Yale.htm](http://www.cc.matsuyama-u.ac.jp/~kuroda/Klezmer_Elizabeth_Yale.htm)

p3.pdf

<http://gcoe.hus.osaka-u.ac.jp/111127workshop3.pdf>

[http://d.hatena.ne.jp/jjsk2010\\_Tsune/](http://d.hatena.ne.jp/jjsk2010_Tsune/)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

黒田 晴之 (KURODA HARUYUKI)

松山大学・経済学部・教授

研究者番号：80320109